



ガンプラーの日



小さな恋

春日信彦

神隠し

11月23日（水）勤労感謝の日、早朝、突然、亜紀の姿が消えた。休日の日でも、いつもならば、7時に起床して、8時には、朝食を食べるためにスパイダーとピースを連れて1階に降りてきた。だが、今朝は、8時15分になっても亜紀はキッチンに姿を現さなかった。まだ眠っていると思ったアンナは、2階に上がる階段の入口から、亜紀の部屋めがけて、「さっさと、食べなさい」とヒステリックな怒りを爆発させた。

いくら叫んでも降りてこない亜紀にムカついたアンナは、叩き起こそうとガニ股でドタドタと階段を駆けあがって行った。そして、鬼の形相になったアンナは、ドアを勢いよく押し開け部屋に飛び込んだ。ところが、部屋の中は、ひんやりと静かで人がいる気配がまったくなかった。部屋の中をグルッと見渡したが、亜紀の姿はなかった。一瞬、初めての出来事にアンナは固まってしまった。

ドアを開ける音で目が覚めたのか、ベッドの上に大の字に寝転がっていたピースが、ピクッとドアの方を振りむき、ピョコンと立ち上がり、ヒョイとベッドを飛び降りてアンナの足元まで歩いてきた。話しかけても通じないとは分かっていたが、不安のあまりつい尋ねた。「ピース、アキは？一緒に寝ていたんじゃないの？」ピースは、身体をアンナの足に体をこすりつけニャ〜ンと鳴いただけだった。

徐々に、鼓動が激しくなってきたアンナは、飛び移るようにして隣のスパイダーの部屋のドアを素早く開いた。ドアを開けた途端、フロアをウロウロ駆けまわっていたスパイダーがワンと吠えた。お腹がペコペコのスパイダーは、しっぽをフリフリ、アンナに跳びかかった。スパイダーの頭をよしよしとなでながら「アキ、知らない？」と同じように尋ねたが、そんなことよりご飯、ご飯と言っているかの如く、部屋を飛び出していった。いったいどこに隠れたの？と思いつつ、じっくりと部屋の隅々まで見渡してみた。でも、この部屋にも亜紀の姿はなかった。

鳥羽は昨日から安田の家に泊まっていることを思い出し、もしかしてと思い、ヒョイと振り向き、向かいの鳥羽の部屋のドアを勢いよく押し開けた。だが、そこにも亜紀の姿はなかった。念のために納戸にしている部屋も覗いたが、やはり、亜紀の姿はなかった。2階のすべての部屋のどこにも亜紀の姿はなかった。いったいどこに隠れたのかしら、と思い小走りで階段を下りて行った。

トイレに隠れているのではと思い、ワツと言ってトイレのドアを勢いよく開いた。そこにも亜紀の姿はなかった。かくれんぼにもほどがあるわ、とムカついたアンナは、「さっさと、出てきなさい。食べないんだったら。朝抜きにするわよ～～」と大きな声で叫んだ。それでも、亜紀の返事は返ってこなかった。亜紀に何かあったのでは、と胸騒ぎが起きた。いったいどこに？まさか、誘拐？顔をブルブルと左右に振り、不吉な予感を払いのけた。

もう一度、アキ、アキと叫んだが、亜紀の返事は一向に返ってこなかった。突然、頭が真っ白になりパニックしたアンナは、アキ、アキ、と宇宙のかなたまで響き渡るような大声で叫びながら、廊下をドタドタと駆けまわった。悲鳴のようなアンナの声にびっくりした拓実は、キッチンで棒立ちになっていた。「ママ、ママ」拓実は、今にも泣きだしそうな声で叫んだ。

アンナは、拓実を見つめると怒鳴るように声をかけた。「アキ、アキを見なかった。アキが、いないの」拓実は、怒られているようで、ワ〜ンと泣き声をあげてアンナの右脚にしがみついた。「泣かないで、ママが悪かった。アキがいないの。ごめんね。タクミ」ちょっと冷静になったアンナは、テーブルに置いていたスマホを手に取り、素早くSAYAKA

にタッチした。ハイ、とさやかの声が返ってくると悲鳴のような声で叫んだ。「いないの、アキが。どうしよう。いないのよ」

さやかは、いったい何のことやらさっぱりわからず、問い返した。「アンナ、落ち着いて。いったい、どうしたの。アキがいないって？」アンナは、胸に手を当て、大きく深呼吸した。「さやか、聞いて。アキがいないのよ。朝から、家のどこにも、いないの。どこに行ったのかしら。まさか、誘拐されたんじゃない」さやかもちょうと不安になった。亜紀が無断で外出したことは、今まで一度もなかった。もしかして、神隠しにあったのではと不安になった。「アンナ、落ち着くのよ。とにかく、すぐに行くから。待ってて」亜紀の失踪の件は、後でドクターにメールすることにして、さやかは、化粧もせず看護師寮を飛び出した。

いてもたってもいられなくなったアンナは、屋外も探すことにした。拓実をダッコしたアンナは、顔を真っ赤にして公園に駆けて行った。拓実をベンチにポンと置いたアンナは、公園の中央にかけて行き、顔を東側から南側へと回転させながら叫んだ。「アキ~~、アキ~~、どこなの~~。アキ~~」アンナの甲高い声は、公園中に響き渡ったが、亜紀からの返事は帰ってこなかった。必死になって叫ぶアンナを見ていた拓実は、勢いよくベンチに立ち上がり、両手をメガホンのようにして渾身の力で、オネ~~チャ~~ン、オネ~~チャ~~ンと叫んだ。

公園から大通りまでくまなく大声でアキ、アキ、と叫んで探しまわったが、それでも亜紀は見つからなかった。「ママ、オネ~チャン、どこに行ったの？」真っ青になっていたアンナは、震える唇で答えた。「あのバカ、どこよ。アキったら、かくれんぼしてるのよ。さっさと出てくればいいのに。困ったもんだわ。タクミ、帰りましょう」アンナは、拓実に心配をかけないように平静さを保って返事した。ヒョイと拓実を抱えたアンナは、頬を膨らませ、自宅に向かった。でも、言葉と裏腹にアンナの心臓は、胸を突き破らんばかりにバックバックと鼓動していた。

朝ごはんにありつけなかったピースは、ふてくされてソファに寝ころび、おなかペコペコのスパイダーは、ご飯はまだか、ご飯はまだか、とキッチンをウロウロ駆け回っていた。玄関ドアが開く音がキッチンまで響くとピースの耳がピクピクっと動いた。スパイダーは、その音を聞くや否やガシガシと音をたて玄関めがけて廊下をかけた。拓実をダッコしたアンナがキッチンにやってくると、ピースはピョコンとソファから飛び降りて、アンナの足元に駆け寄った。

拓実をテーブルにつかせ、アンナもイラつく気持ちを抑えて腰をドスンと落とした。どこに行ったの？どこに行ったの？と何度も心の中でつぶやいた。ふと、拓実に目をやると、お腹がペコペコだったのか、上手にスプーンを使って黙々とコーンフレークを食べていた。ニャ〜〜ン、ニャ〜〜ンと甘えるような鳴き声とワンワンと吠えるおねだりの声が、いらだつ心に響いてきた。

そうか、まだだったか、と我に返ったアンナは、さっと立ち上がり、ピースには低炭水化物のシンプリーキャットフード、スパイダーには無添加のモグワンドッグフードを食べさせた。お腹いっぱいになったピースは、ソファーに寝転がり、アキちゃん、早く来ないかな〜、と退屈そうな顔でつぶやき、モフモフさせながら亜紀が現れるのを待った。スパイダーは食後の散歩に出かけたかったが、誰も、散歩に連れて行ってくれないので、しょうがなく、廊下をウロウロしていた。

ピースとスパイダーにとって、食後、亜紀と戯れない時間は初めてであった。ピースは、話し相手としては不服だったが、スパイダーに声をかけた。「スパイダー、ちょっとこっちにおいでよ。話があるから。さあ」スパイダーは、またお説教と思いのりくらしとソファーに近づいて行った。ピースは、マジな顔つきになってスパイダーに話しかけた。「今日は、変じゃない。亜紀ちゃんが、どこにもいない。どうしたんだろうね。お友達のうちにでも、遊びに行ってるのかしら」

スパイダーは、亜紀ちゃんのことだと分かり、ホツとして気軽に返事した。「亜紀ちゃんは、子供なんだから、遊びに行ってるに決まってるじゃないか。でも、僕たちにご飯も食べさせずに遊びに行くとは、残酷だね。やっぱ、人間の子供って、こんなもんなのかな〜」ピースは、亜紀ちゃんは思いやりのある子供だと信じていた。「ちょっと、亜紀ちゃんは、そんな子供じゃないわよ。いつもかわいがってくれるし、ご飯も食べさせてくれてるでしょ。何か事情があって、出かけたのよ。もうしばらくしたら、帰ってくるかも」

首をかしげたスパイダーは、ヒゲをピクピクツとさせ、ニコツと笑顔を作り返事した。「ってことは、お土産があるってことだね。ヤッター、今日のご馳走が食べられるってことだな。早く、亜紀ちゃん、帰ってこないかな〜」また食べることにしか考えてないとあきれたピースだったが、朝の様子を考えてちょっと心配になっていた。「でも、今朝の大騒ぎは、何だったんだろうね。アキ、アキって、ママが叫んでいたでしょ。あれって、どういうことかしら？」

スパイダーは、犬の吠える習慣から判断して答えた。「猫にはわからないのかい。犬が吠えるように、人間も大きな声を出すんだよ。亜紀ちゃんがいなくて、元気良く、大きな声で呼んだってことだよ」ピースは、ちょっと納得がいかなかった。「でも、どうして、子供を呼ぶのにあんなに大騒ぎするんだろうね。人間って、やっぱ、猫とは違うみたいね。猫なんか、子猫がいなくなっても、泣き声を頼りに黙って探して、見つけたら首をくわえて運ぶんだけどね。あんなに、大騒ぎしても、見つからないと思うんだけど」

能天気なスパイダーは、ワンと言って答えた。「ピースは、考え過ぎじゃないか。そもそも、人間と動物は違うんだ。特に、人間は、コトバという変な声を発するからな～。その点、亜紀ちゃんは、ワンとかニャ～～とか言わなくても、僕たちの気持ちをちゃんとわかってくれるから、気が楽だよ。あの甲高い声を発するオニママは、何をしでかすかわかつものじゃない。この前なんか、元気に廊下を走っただけで、僕のお尻をピシヤッて叩いたんだ。わけわかんないよ。早く、亜紀ちゃん、帰ってこないかな～」

スパイダーは、やはりアホだとピースは思った。「分かってないわね～、人間には人間のオキテってものがあるのよ。廊下は、走っちゃいけないの。わたしなんか、足音を立てずに、忍者のように歩いているのよ。見習ったらどう。つまり、人間のオキテに逆らったから、ママにお尻ペンペンされたんでしょ。これからは、もっと、静かに歩きなさい。犬って、ヤツパ、野蛮ってことかしら」

バカにされたスパイダーは、ピースをにらみ付けた。「何を言ってるんだ。犬は、動物の中で一番、健全なる精神を持っているんだ。猫と一緒にされちゃ、迷惑だ。人間のオキテかなんだか知らないが、そのオキテが間違ってるんじゃないか。犬ってものは、健康のために走り回っているんだ。健全（けんぜん）なる精神は健全なる身体（しんたい）に宿（やど）る、っていうじゃないか。ゴロゴロ寝ころんでテレビを見てるような人間は、すぐに痴呆症（ちほうしょう）になって、早死にするに決まっている」

ピースは、減らず口を叩くスパイダーに愛想をつかし、いつもの忠告をした。「何回言ってもわかんないのね。郷（ごう）に入（い）りては郷（ごう）に従（したが）え、っていうでしょ。人間と共同生活するんだから、人間に合わせるのが、スジってものじゃないかしら。あんまり人間に立てついてると、ご飯食べさせてもらえなくなるかもよ。それでも、いいの？」スパイダーは、ピョンと飛び上がり、顔をブルブルと左右に振った。「そんな～～、それって、イジメじゃないか。亜紀ちゃんは、絶対、そんなことはしないさ。僕は、信じてるもん」

ピースは、スパイダーの減らず口と付き合っているうちに亜紀ちゃんが現れないかと期待していたが、亜紀の姿はいまだ現れなかった。「それにしても、亜紀ちゃん、どうしたのかしら。ママとケンカして、家を出ていちゃったのかしら。あのママって、ちょっとキモイから」スパイダーもうなずいて答えた。「そうだよな～～。あのオニみたいなママにいじめられたに違いない。あのオニママをやっつけようか」

短絡的思考のスパイダーにあきれたピースは、たしなめるように返事した。「ちょっと、そんなに見かけだけで決めつけちゃダメ。あのママは、キモイけど、優しいところもあるじゃない。二人の仲は良くないようだけど、かわいいアキちゃんをイジメたりしないわよ。もうちょっと、待ってみましょう。とにかく、廊下を走り回らずに、お座りして、待っていなさい、分かった」

じっとしているのが苦手なスパイダーは、頭をガクツと垂れた。「分かったよ。でも、早く、散歩に行きたいよ～。アキチャ～～～ン、早く帰ってきて～～」スパイダーは、喉を鳴らして叫んだ。その時、玄関からドアが開く音が響いてきた。亜紀ちゃんが帰ってきたと思ったスパイダーは、一目散に玄関にかけて行った。ところが、玄関に立っていたのは、動物愛護精神に乏しいチンチクリンのさやかだった。なんだ、亜紀ちゃんじゃないのか、と思ったスパイダーは、即座にキッチンに引き返した。

引き返したスパイダーは、ウキウキして待っていたピースに報告した。「つまんないの。亜紀ちゃんじゃなかった。例のチンチクリンの子供みたいな大人だった」ピースは、子供みたいな大人と聞いて、即座に、動物をオモチャにするさやかだとピンときた。「アンナ～、ダイジョウブ～～」廊下をかけてくる足音がキッチンに近づいてきた。スパイダーは、ドタドタと響く廊下の音を聞いて、ピースにイヤミを言った。「ほら、人間だって、廊下を走ってるじゃないか。あんな人間にも、お尻ペンペンしてほしいものだ」

血相を変えて走り込んできたさやかは、アンナの青くなった顔を見つめて声をかけた。「まだ、帰ってこない。本当に、どうしたのかしら」さやかは、アンナの正面に腰かけ、アンナの落ち込んだ顔を覗き込んだ。「こんなことは、初めて。誘拐されたんじゃないかしら。まさか、殺されたんじゃない」アンナは、両手を顔に当て、ワ～～～と泣き出した。さやかも、誘拐事件かと思った瞬間、身体が震えだした。

家出

「アンナ、警察に届けましょう。万が一、誘拐されていたら、大変なことになるわ。一刻も早く、助け出さないと」オドオドしているばかりでは、なんの解決にもならないと思い、糸島警察署に電話することにした。さやかが電話して30分ほどすると、小太りの刑事とアゴにヒゲを生やした二人の刑事がやってきた。ピンポ〜〜ン、ピンポ〜〜ン、とインターホーンが鳴ると、さやかは駆け足で玄関に向かった。さやかは、大きな声でドアに向かって声をかけた。「お待ちしてました。どうぞ、お入りください」

小太り刑事とヒゲ刑事は、ゆっくりとドアを開き、神妙な顔で会釈した。二人の刑事の顔を見たとき、さやかは、今年のクリスマスの出来事を思い出した。「あの時の刑事さんね」小太り刑事は、頭をかきながら返事した。「ハ〜、ところで、アキちゃんが、いなくなったとか？」ピョンと飛び上がったさやかは、甲高い声で返事した。「そうなんです。とにかく、上がってください」

さやかに案内された二人の刑事は、気乗りしない表情をして廊下をゆっくり歩いて行った。キッチンにやってくると、小太り刑事は、軽く会釈すると血の気のない表情のアンナに声をかけた。「まだ、誘拐と決まったわけでは、ありません。詳しくお話をお聞かせください」さやかは、「さあどうぞ」と手招きして二人の刑事に椅子をすすめた。アンナは、涙を流すばかりでまったく言葉が出なかった。

そこで代わりに、さやかが、アンナから聞いた話を自分なりにまとめて説明することにした。「アキちゃんが、今朝から、どこを探してもいないのです。家の中も、家の周りも、公園も探してみたのですが、どこにも見当たらないのです。誘拐ということも考えられましたので、お電話いたしました」二人の刑事は、メモを取っていたが、事件なのかどうかを考えているようだった。

小太り刑事が、短い首を傾げ怪訝そうな顔で質問した。「つまり、アキちゃんが、今朝、いなくなったのですね」アンナは、ハンカチで涙を拭きながら、「はい」とか細い声で答えた。小太り刑事は質問を続けた。「昨夜、アキちゃんは、自分の部屋におられたのですか？」アンナは、うなずいた。「昨夜は、キッチンで夕食を済ませ、ちょっとリビングでテレビを見て、2階の自分の部屋に上がっていきました。宿題をして、寝たと思います」

左右に首を振った小太り刑事は、ウ〜〜ツとうなって意見を述べた。「確かに、昨夜は部屋にいたが、今朝、部屋を覗いてみるとアキちゃんの姿が見当たらない。ホ〜〜、なるほど、それじゃ、誘拐とは考えにくいですね。誰かが夜に忍び込んで誘拐したとなれば、どこから入って、どこから連れ去ったか、ですが・・・確か、家の中に番犬がいたような・・・」ヒゲ刑事も誘拐でなく、よくある家出ではないかと思った。

さやかは人間業とは考えられないと思い、口をはさんだ。「夜中に突然消えるなんて、神隠しに違いありません。1階の戸締りはしっかりしてますし、ドアや窓が壊された形跡はありません。それに、2階のベランダの窓もロックされてますし、ベランダから侵入したとは思われません。それと、誰かが侵入したなら、一緒に寝ている賢いネコがニャ〜と鳴くはずです。そして、その鳴き声を聞いた隣の部屋の番犬が、ワンワンと吠えるはずですよ」その通りと言わんばかりの表情で、真っ赤な目をギョギョッと開いてアンナもうなずいた。

小太り刑事は、小さくうなずき意見を述べた。「神隠しですか？ま〜、それはさておき、さやかさんのお話からして、誘拐ではないと思われませんか？誘拐じゃないとなれば、家出じゃないでしょうか？最近、家出が多いんですよ。何か心当たりはありませんか？昨夜、親子ゲンカをしたとか、学校に行きたくないとかつぶやいていたとか。何か、変わった様子はありませんでしたか？」アンナは、うつむいたまま顔を左右に振った。

二人の刑事は、顔を見合わせてうなずいた。「お母さん、気を悪くしないでください。間違いなく、家出だと思います。本当に、近頃は家出が多いのです。家出の理由は、いろいろですが、特に、ここ最近、学校でのイジメが原因で家出をする小学生、中学生が増えています。でも、家族に黙って、お友達の家に行っている場合もありますので、親しくされているお友達に、電話なされてはいかがでしょう」

さやかは、うなずきアンナに電話をするように促した。「アンナ、モモエちゃんとか、マサコちゃんとか、ジュンコちゃんとか、親しい友達に電話してみなさいよ。泣いていても、アキちゃんは、帰ってはこないのよ。さあ、早く」アンナは、スマホのアドレスを開き親しい友達の名前にタッチした。数人の友達と担任の先生に電話したが、亜紀は来てないとのことだった。小太り刑事は、困り果てた顔で尋ねた。「よく遊びに行っていた場所はありませんか？」この世の終わりと言わんばかりの表情をしたアンナは、静かに顔を左右に振った。

小太り刑事は、話を続けた。「アキちゃんは、まだ小学生ですから、一人で遠くには行かないと思われませんが、家出の場合、大都会にあこがれて、あてもなく、関東、関西に行くことがあります。そういった場合、全国に捜索願を出すことになります。ところで、申し訳ありませんが、アキちゃんの部屋を見させてもらってもよろしいでしょうか？置手紙があるとか、日記に思いを書いているとか、そういう場合がありますので。よろしければ、アキちゃんの部屋に案内していただけますか？」

アンナは、左横のさやかの顔を見つめた。さやかは、うなずき返事した。「はい、刑事さん、アキの部屋は、2階です。ご案内します」さやかを先頭に二人の刑事は、2階に上がって行った。階段を上りきった右手の部屋が亜紀の部屋だった。さやかが「どうぞ」と言って、ドアを開けた。まず、小太り刑事がグルッと部屋の中を見渡し、ゆっくりと足を踏み入れた。次にヒゲ刑事がキョロキョロとあたりを見渡して、失礼、と言って部屋に入った。

学習机に一直線に歩み寄ったヒゲ刑事は、机の中央に立ててあったガンプラを左手に取りマジマジと見つめた。小太り刑事は、丁寧に引き出しを開き、じろじろとその中を覗き込んだ。ガンダム小物入れに、アラレちゃんノートか、とつぶやき、一冊のノートを取り出し、机の上に置いた。「見てもよろしいですか？」とさやかに確認し、ハイ、という了解を得るとノートを開いた。ピラピラとノートをめくったが、ゴシック体の英語が書かれてあって、日記とは思われなかった。

小太り刑事が机右の5段型本棚に目を移すと、本棚の上から2番目に置いてある旧型の14インチノートパソコンが目にとまった。ワードに日記があるかもしれないと思った彼は、落とさないように両手でそっと取り出した。さやかに目を移すと開いても差し支えないか、承諾を求めた。ハイ、というさやかな返事を聞くと電源を入れた。Windows7が開かれると、引き出しの中にあったアラレちゃん小物入れからUSBを取り出し、左側のソケットに差し込んだ。

ピロロ〜〜んとかわいい音が響くとリムーバブルアイコンが現れた。アイコンをダブルクリックすると日記らしきものが現れた。日付に沿ってここ最近の日記を開き、小太り刑事はしばらく読んでみたが、悩みが書かれている様子ではなかった。左後方からディスプレイを覗いていたヒゲ刑事は、理路整然とした文章を読んだ瞬間、この子は、かなり頭がいいと判断した。

小学生とは思えないしっかりした文章に感心した小太り刑事は、さやかに声をかけた。「立派な文章ですな～～。特に、思い悩んでいるような文章はないようですが、家出をほのめかすようなそぶりはありませんでしたか？」さやかは、亜紀のことはよく知っているつもりだったが、ここ最近同居していなかったため、思い当たることがなかった。「以前は、この家に同居していたのですが、ここ半年ほどは看護師寮に住んでいますので、最近の亜紀のことは、よくわかりません。特に、学校生活のことは、まったくと言っていいほどわかりません」

ガンプラ趣味のヒゲ刑事は、ガンプラを何度もジロジロ見つめていた。ペイルライダー、とつぶやき、どこか他にガンプラが置かれてないか、もう一度、部屋の隅々まで見渡した。そして、怪訝そうな顔つきでさやかに尋ねた。「アキちゃんは、ガンプラが趣味ですか？」ガンダムが好きなのは知っていたが、ガンプラを組み立てているところを見たことがなかった。「そうですね。趣味といえば趣味なのかもしれませんが、ガンプラを組み立てているところは、見たことはありません」

ヒゲ刑事は、ガンプラが机の中央に置かれてあったことが気になっていた。「そうですか、ガンプラは、これ一つですね。僕もガンプラファンなのですが、たいていの場合、数種類のガンプラを持っているものです。たった、一つ・・・ところで、弟は、いますか？」さやかは、2歳で亡くなった弟のことを話すべきか悩んだが、隠すようなことではないと思い事実を話すことにした。「弟は、いました。でも、2歳の時に亡くなりました。そのガンプラは、その弟の形見です。それと、刑事さんだから言いますが、アンナには、内緒ですよ」

ヒゲ刑事は、即座にうなずいた。家出の原因にかかわる情報に違いないと直感した。小太り刑事も身を乗り出し、話を促した。「もちろん、口はかたいですから。ぜひ、お聞かせください」さやかは、話を続けた。「実を言いますと、アンナは、亜紀ちゃんの実の母親じゃないのです。実の母親は、亜紀ちゃんが4歳、弟が2歳の時、失踪したのです。それで、アンナが、亜紀ちゃんを引き取ったのです」

小太り刑事は、「なるほど、そういう親子関係だったのですか」とつぶやき、ヒゲ刑事は、形見のガンブラを見つめながらしばらく考え込んだ。このガンブラが行き先のヒントではないかとピピ〜んときた。「そうだ、下宿している男子高校生がいましたね、今、彼はいますか？」さやかは、即座に答えた。「いいえ、トバ君は、昨日から、友達のうちに行っているそうです」一度うなずき、質問を続けた。「ということは、昨夜は、いなかったわけですね」さやかは、大きくうなずいた。ヒゲ刑事は、鳥羽という高校生が、家出に関係しているんじゃないかと推測した。

小太り刑事は、腕組みをして大きなため息をついた。「ウ〜〜、手がかり、なしか。家出なんだろうが、いったい、どこに行ったのか？賢いアキちゃんだから、自殺はしないと思うが・・おい、サワどう思う？」ヒゲ刑事は、ひらめいた時の笑顔を見せると小太り刑事に耳打ちした。小太り刑事は、小さくうなずきさやかに声をかけた。「ちょっと、二人だけにしてもらえませんか。今後のことを考えますので」さやかは、ハイ、と答えて亜紀の部屋を出て行った。

1階に取り残されていたアンナは、意気消沈しテーブルに突っ伏していた。ピースとスパイダーも何気に寂しそうな表情をしていた。アンナの正面に腰かけたさやかは、アンナの右肩をポンと叩いた。アンナは、涙で化粧が崩れたキモイ顔をゆっくり持ち上げた。そして、ア〜〜、と大きなタメ息をつき、自分を責めた。「きっと、イジメを苦にして、家出したんだわ。わたしがバカな中卒だから、みんなにイジメられたのよ。すべて、私が悪いんだわ。母親になんかに、ならなければよかったのよ。ア〜〜、どうすればいいの」

さやかは、家出には違うなと思ったが、原因がイジメなのかどうかは、はっきりしないと思った。さやかは、アンナを慰めようと優しく声をかけた。「アンナ、そんなに自分を責めちゃダメ。イジメが原因で家出したとは、限らないんだから。何か、思うことがあって、黙って家を出たのよ。決して、アンナを困らせようと思って、家出したんじゃないと思うの。夕方には、きっと帰ってくるわよ。とにかく、もうしばらく、待ちましょう」

アンナは、黙って聞いていたが、家出の原因は自分にあるようで、悲しくて涙が止まらなかった。「だったら、どんなつもりで家出したのさ。イジメじゃなかったら、なんなのよ。答えてよ、さやか」さやかにも家出の原因は、まったく見当がつかなかった。答えようにもこたえられなかったが、学校のイジメが、家出の原因ではないと確信していた。きっと、何か他に家出の原因があると思った。

「学校のイジメのことは、よくわからないけど、イジメじゃなくて、何か他に理由があるのよ。アキちゃんを信用してあげて。きっと、アンナにも言えない何か理由があるのよ。アキちゃんを信じようよ。アキちゃんを心から信じてあげられるのは、アンナしかいないのよ」万が一、学校でイジメにあったとしても、家出をするようなヤワな子じゃないと思った。また、ママ母のアンナとのいざこざがあったとしても、気の強い亜紀だったら、前向きに生きていけると思った。アンナは、小さくうなずいたが、それでも気持ちは晴れなかった。

「だったら、母親にも言えないことって何よ。思春期の中学生だったら、わかんなくもないけど、まだ、アキは、小学3年生よ。どんな、隠し事があるっていうの。やっぱ、中卒のママ母が、いやになって、家出したのよ。最近、理屈っぽい口答えをするようになっていたし、黙って遊びに行くこともあったし、やっぱ、そうに、決まってる。アンナは、母親として失格ってことよ。アキを引き取らなかつたらよかったのよ」

アンナは、ますます自分を追い込んでいった。これ以上どうやって慰めていいかわからなくなった。「アンナ、アキちゃんを信じてあげて。アンナは、素晴らしいお母さんよ。太鼓判を押すわ。さやかは、アキちゃんを信じる。きっと、夕方には、笑顔で帰ってくるから。アンナ、心配なんかなくていいの」血の気が引いたアンナの顔は、見るも無残な妖怪のようになっていた。

さやかが、お茶を入れようと立ち上がった時、階段を下りてくるパタパタというスリッパの音が聞こえてきた。ほんの少し笑顔を見せた二人の刑事が、ゆっくりとテーブルに歩み寄ってきた。テーブルの椅子に腰かけ、アンナに話しかけた。「お母さん、ご安心ください。アキちゃんは、今夜までに、必ず、無事戻ってきます。日記を読ませていただきましたが、とても聡明で思いやりのあるお子さんじゃないですか。涙が出るほど感銘しました」

アンナは、なんの根拠もないのに無事戻ってくると断言するなんて、無責任なデカだと思った。家出のことには、これ以上かかわりたくなくて、さっさと引き返したくて、適当なことを言っているように思えた。「刑事さん、どうして、今夜中に戻ってくると、断言できるんですか。アキからの連絡は、まったくないんですよ。悪い誰かに呼び出されて、軟禁されているかもしれないし。殺されているかもしれないし。どうして、そんな無責任なことを言うんですか」

小太り刑事は、言葉に詰まったが、ヒゲ刑事が返事した。「おっしゃるように、確かな根拠はありません。最悪の場合も考えられます。でも、僕は、信じられるのです。アキちゃんは、お母さんのことが大好きです。確かに、母親に黙って、家を出て行ったことは、よくないことです。でも、誰にでも、どうしても素直になれず、ちょっとした一言が言えないことってあると思うんです。アキちゃんを信じてあげてください。そして、戻ってきたら、叱らずに、何も聞かずに、抱きしめてあげてください。お願いします」

ヒゲ刑事は、亜紀がどこに行ったか、形見のガンブラから推理していた。それに、黙って出て行った気持ちもなんとなく理解できた。アンナは、絞り出すような声でつぶやいた。「アキのバカ、ママは、アキのこと、大好きなのよ。どうして、黙って、出て行くの」小太り刑事が話を続けた。「きっと、アキちゃんは、戻ってきます。今夜、9時までに戻ってこなかったなら、全国に捜索願を出します。お母さん、安心してください。必ず、元気に戻ってきますから」

さやかも、笑顔で戻ってくるように思えた。悪い誰かに呼び出されて、軟禁されたということも考えられなくもなかったが、最悪のことを考えれば、気がめいってしまうだけだと思った。黙って出かけたのは、かくれんぼのつもりで、仲のいい友達と一緒にHKT48 劇場に行っているんじゃないかと思えた。とにかく、神様を信じ、アキちゃんが無事に戻ってくることを祈るしかないと思えた。

二人の刑事は、アンナに「心配なさらないで、待っていてください」と言葉をかけると軽く会釈をして玄関に向かった。さやかは、玄関まで見送ると二人の刑事は、もう一度さやかに会釈して玄関を出た。後を追うようにさやかも玄関を飛び出し、親身になって相談に乗ってくれた二人の刑事に頭を下げた。向かいの駐車場で待っていたスズキスイフトスポーツは、二人の刑事を乗せると静かに動き出した。

キッチンに戻ったさやかは、アンナを落ち着かせるためにしばらく寝かせることにした。「アンナ、心配し過ぎは、身体に悪いわよ。ちょっと、横になって、気を楽にしたらどう。タクミのことは、さやかが見てるから、安心して。昼食は、さやかを作るから、任せて」小柄なさやかは、椅子から立ち上がった女子プロレスラーのようなアンナを支えながら、寝室に向かった。アンナは、寝床に立つと崩れ落ちるようにバタンと倒れた。

GUMPLA EXPO

昼メシに蕎麦を食べることにした二人の刑事は、佐賀まで足をのばすことにした。ダークグレーのスイスポは、クネクネとハヤピンカーブが続く糸島峠（いとしまとおげ）と三瀬峠（みつせとおげ）を爽快に走り続け、無声庵（むせいあん）に向かった。助手席に腰かけた小太り刑事、伊達は、ぼんやりとアキちゃん家出事件のことを考えていた。また、伊達は、今夜までに必ず戻ってくると断言したことに一抹の不安を感じていた。

アキちゃんは友達と遊びに行っているだけだから、今夜までに間違いなく戻ってくる、とヒゲ刑事、沢富が断言したことを信じ、母親にも、そのようなことを伊達は言ってしまったが、何を根拠に沢富が断言したのか、その理由をもっと具体的に知りたかった。「おい、サワ、本当に戻ってくるんだろうな。戻ってこなかったときは、俺たち、ぶっ飛ばされるんじゃないか。あの美人、ケンカ、強そうだったぞ。どうなんだ、間違いはないんだろうな」

沢富は、ニヤツと笑顔を作って返事した。「アキちゃんは、友達と遊びに行ったに違いありません。きっと、明るい笑顔で戻ってきます。僕を信じてください」伊達は、信じてはいたが、そう断言できる根拠をより具体的に教えてほしかった。「信じるさ。サワが言うことは、大体、当たっているからな。疑うわけじゃないが、もう少し、俺にもわかるように話してくれないか。別に、隠さなくてもいいじゃないか、な～～サワ」

沢富は、自分の直感を具体的な話にするためにさっきからずっと考えをまとめていた。「いや、隠すつもりはありません。形見のガンプラを手にとった時、ガンプラで遊んでいるアキちゃんと幼児の姿が脳裏に映し出されたんです。その時、ビビッと行き先が閃いたんです。きっと、あそこに違いないと」伊達は、イラッと来た。「だから、聞いてるんじゃないか。あそこじゃわからん。アキちゃんは、誰とどこに遊びに行ってるんだ。じらすなよ。どこなんだ？」

沢富は、マジな顔になって答えた。「クイズ、今日は、何の日でしょうか？」伊達は、即座に答えた。「勤労感謝の日だ。俺を、バカにしてんな。それがどうした」沢富は、一度うなずき話を続けた。「その通り、正解です。そのほかに、今日はガンプラの日でもあるんです」伊達は、からかっていると思い、ムカついた。「おい、ガンプラの日なんて、聞いたことないぞ。そんな日、いつからできたんだ？ガンプラファンが、勝手に作ったんだろ」

沢富は、苦笑いをして答えた。「まあ、そういうことなのですが、今日はアキバでやっているガンプラエキスポの最終日なんです。だから、ガンプラの日、って言ったんです」伊達は、ますます意味が分からなくなり、カチンと来てしまった。「いったい、そのガンプラとアキちゃんの行き先とどういう関係がるんだ。まさか、アキバに行ってるだけでも言うんじゃないだろうな」

沢富は、助手席の伊達をチラッと見て答えた。「はい、そのまさかです。きっと、誰かと一緒に行っているはずですよ」伊達は、あまりにも信じられない話に腰を抜かしてしまった。「おい、アキバは、東京だぞ。いくらなんでも、小学生たちで、アキバに行くか？そうは思えんがな～。今回ばかりは、サワの予想は、ハズレだな」予想を否定された沢富だったが、平静さを保ち、ドヤ顔になって答えた。

「いいえ、予想は、アタリです。見ていてください。きっと、友達と一緒に帰ってきます。でも、その友達は、高校生じゃないかと思っています。ほら、同居の鳥羽という高校生が、昨日からいなかったでしょ。僕は、そのことに、ピンときたんです。きっと、その高校生と一緒に、アキバに行ったのです。間違いありません」伊達は、そういわれてみると、そのようにも思えてきた。「ホ～～、もしかすると、サワの予想が当たっているかもな」

伊達は、話を続けた。「ということは、その鳥羽という高校生は、ガンプラファンで、最初は、一人で行こうと思ったが、アキバ観光を兼ねて、アキちゃんをガンプラエキスポに連れて行ったということだな」沢富は、ほんの少し首をかしげた。黄色から赤に変わった信号機に気づき、ブレーキをグイッと踏み込んだ。「僕も、最初は、そうじゃないかと思ったんです。でも、どうも、そうじゃないような気もするんです」

伊達は、その理由を聞きたくなかった。「それじゃ、逆に、アキちゃんが、鳥羽をアキバに誘ったというのか？」沢富は、ウ～～、とうなり、返事した。「思うに、鳥羽は、アキちゃんの持つてるガンプラが、弟の形見だと知らされていたんです。今日がガンプラエキスポの最終日なんです。アキちゃんは、ガンプラエキスポ最終日のことを鳥羽に話したんじゃないかと思うのです。それを聞いた鳥羽は、アキちゃんの思いを叶えるために、アキバに連れて行ったんじゃないかと」

伊達は、ホ～～とうなり、うなずいた。「なるほど、鳥羽は、ガンプラファンでもないのに、自分もガンプラファンであるかのように言って、アキちゃんをガンプラエキスポに誘ったということか。でも、黙って、行くことは、なかったんじゃないか。もう高校生なんだから、ちゃんと承諾をもらうべきじゃなかったのか。黙って出かければ、大騒ぎになることぐらいわかるだろ。間抜けな高校生だな～。今どきの高校生って、こんなもんか」

沢富は、黙って出かけたことがどうも納得がいかなかった。伊達が言うように、黙って出かければ大騒ぎになることはわかりきっている。それにもかかわらず、なぜ、黙って出かけたのか？鳥羽という高校生は、数学の天才と聞いている。間抜けなはずがない、何か、考えがあったに違いない。「先輩、トバは、数学の天才です。間抜けじゃありませんよ。計算づくの行動ですよ。きっと、何か、考えがあって、黙って出て行ったんだと思います」

伊達は、まったく納得がいかなかった。どんな考えがあるにしろ、ちょっとしたアキバへの外出なのに、そんなことも確認できず、もし、全国に捜索願を出していたなら、警察は笑いものになっている。その鳥羽という奴は、警察に恨みでもあるんじゃないかと思えてきた。「つまり、警察に捜索願を出させて、間抜けな警察、ザマ〜ミロ、ってか。俺たちを笑いものにしようってことか？不定奴だ、イタズラにも、ほどがある。戻ってきたら、とっちめてやる」

沢富は、小さく顔を振った。「そう考えられるかもしれませんが。中学生や高校生たちの警察や大人たちに対する理由なき反抗です。でも、トバ君に、普通の高校生とは何か違うものを感じるのです。よくわからないのですが、トバとアキちゃんには、なにかぼんやりとした同じような影が見えるんです。何かが共通しているような気がして。類（るい）をもって集まる、っていうじゃないですか」

伊達は、鳥羽のことを考えれば考えるほどムカついてきた。「とにかくだな～、本当にアキちゃんを連れだしていたんなら、誘拐犯と同じだ。黙って連れ出し、母親に心配させたことは事実だ。警察は、全国に捜索願を出すところまで来ていた。はっきり言って、大人たちに対するイジメだ。数学の天才かもしれないが、オトナの常識ってもんがある。今回ばかりは、許せん。ボコボコにとっちめてやる。今に見ている」

じっと聞いていた沢富は、伊達の気持ちはもつともだと思った。でも、どこか違うように思えて仕方なかった。今回の家出は、アキちゃんのためにやったに違いない。でも、どうして、黙って家を出たのか？その理由がどうしてもわからなかった。ヒントは、形見のガンプラにあるんじゃないかと思えた。机の上にガンプラを置いたのは、鳥羽ではないかと思えた。スイスポは、左のウィンカーを点滅させると無声庵と表示された案内板から左に折れて細い路地に入って行った。

古民家風のお店に入ると沢富は、かつて美緒と一緒に食事した窓際のテーブルに歩いて行った。二人がテーブルに着くと即座に若作りのおばちゃんが、笑顔で注文を取りに来た。お品書きを伊達に手渡し、沢富は「エビ天セット」と言った。エビと聞いた伊達も大好物のエビ天セットを注文した。先ほどの伊達の怒りは、ただ事ではないと思い、鳥羽の弁護をすることにした。「先輩、そう、鳥羽を責めないでください。きっと、深いわけがあるんですよ。決して、悪気があって、アキちゃんを連れ出したんじゃないと思います」

沢富の弁護を聞いて、ますます頭に血が上った。「あたりまえだ。悪気があってたまるものか。結果的に、迷惑をかけたんだ。ドゲザさせて、謝らせてやる。俺が、刑事じゃなかったら、ボコボコにしてやるんだが」沢富は、必死に考えて弁護を続けた。「ちょっと、待ってください。だから、トバには何か事情があったんです。アキバ行は、間違いなくアキちゃんのためなんです。そのことは、分かってあげてください」

伊達は、腕組みをして窓の外を眺めた。「まあな、確かに、アキバ行は、アキちゃんのためだったろうよ。でもな、黙って出て行ったことは、許せん、と言ってるんだ。ちゃんと母親の承諾を取ってれば、こんな、警察沙汰には、ならなかったんだ。高校生ともあろうものが」伊達の言うことは、至極もつともだった。だからこそ、鳥羽が、黙って出て行ったことが不思議でならなかった。アキちゃんのことを本当に思っているのならば、母親の承諾を取って、気楽にアキバに行ったはずなのだが。いったいなぜ・・・

エビ天が運ばれてくると、伊達は、ガブツとエビ天にかみついた。きっと、むしゃくしゃしていたに違いなかった。伊達が、イラつくのは、当然だった。沢富は、そばを口に運びながら、形見のことを考えてみた。アキちゃんのためのアキバ行は、間違いなしとして、そこでだが、そのアキちゃんのため、とはどういうことか？今までずっと、アキちゃんがアキバに行きたがっていたから、鳥羽が、アキちゃんをアキバに連れて行った、と考えていた。

果たしてそうなのか？単にそうであれば、母親に黙ってアキバに行くことはない。黙って行けば、母親が心配することは、当然、鳥羽は予想できたはず。あえて黙って行ったということは、“母親に心配させること”が、真の目的だったと言えないか？鳥羽は、心配する母親の姿を亜紀ちゃんに見せることによって、“ママ母の愛情”を知らせたかったのではなかろうか？こう考えられなくもなかったが、男子高校生が、このような込み入ったことを考えて、実行するだろうか？

もはや、警察沙汰になった今、鳥羽は、非難の的になっている。母親からも警察からもボコボコにやられるかもしれない。聡明な鳥羽が、こんな危険な状態を自ら作り出すだろうか？もし、警察沙汰も予測した行為であれば、なぜ、こんなにも自分に不利になる行為をしでかしたのか？ここまで考えてみると、どうやら、鳥羽とアキちゃんに共通する異様な影が、ヒントになっているような気もする。沢富は、さやかが言っていたことを思い出しながら考えた。

アキちゃんは、4歳のころに、2歳の弟をなくし、しかも、母親は失踪している。鳥羽はどうか？もしかすると、鳥羽も子供のころに母親が失踪していたのではないだろうか？そうであれば、二人とも、子供のころに、母親に捨てられたことになる。言い方を変えれば、どちらの母親も、子供に黙って、家出したことになる。そう考えると、鳥羽の取った行為が分からなくもない。

もし、仮に、そのことが事実だとすれば、鳥羽は、母親を憎んでいるかもしれない。一方、母親への強い思いもあるはず。きっと、鳥羽には、自分ではどうすることもできない、母親への憎悪と愛があるに違いない。だから、こんなバカげた家出をしでかしたのかもしれない。鳥羽とアキちゃんに共通する心の奥底にある母親への憎しみと愛が、二人を結びつけ、今回の家出を引き起こさせたのだろう。でも、二人の思いは、だれもわかってあげられないように思えた。

伊達は、そばをむしゃむしゃ食べながら、ぼんやり考え込んでいる沢富を見て、声をかけた。「おい、さっさと食べないか。お前はウシか」我に返った沢富は、子供のような笑顔を作って、エビ天にかぶりついた。口をもぐもぐさせながら、伊達にお願いした。「先輩、お願いがあります」伊達は、大好物のエビ天を食べて、なんとなく機嫌がよくなっていた。

「なんだ、金のことなら、お断りだ。安月給の公務員に、お金の話は、御法度だ。それ以外のことだったら、話してみろ」

沢富は、正座して、マジな顔つきで話し始めた。「トバのことですが、許してあげてほしいのです。今回の家出は、アキちゃんのためです。とにかく、理由はともあれ、トバがやったことは、悪いことです。でも、何も言わず、許してあげてほしいのです。お願いします。土下座だったら、僕が代わって致します。どうかお願いします」突拍子もない話に伊達は、腰を飛び上がらせて驚いたが、そこまでお願いされれば、ウンと言わざるを得なかった。

両手の指で頭をガシガシとかきむしった伊達は、怒鳴るように返事した。「分かった。クソガキめ、ウ〜〜、許す」伊達には、沢富の真意が、よくわからなかったが、とにかく、許すことにした。「昼メシは、僕のおごりです。今夜は、パ〜〜と行きましょう。もちろん、僕のおごりで」伊達は、ちょっと貸しを作ったようで、機嫌がよくなった。「そうか。まあ、サワが、そういうのなら、パ〜〜と行くか」

自白

家の中は、静まりかえっていた。アンナは、死にたい気持ちで体を起こすこともできず、昼食も喉を通らず、午前中から寝床に横たわっていた。午後5時を過ぎても亜紀は戻ってこなかった。アキからも、誘拐犯らしき人物からも、電話はなかった。さやかな不安は、ますます大きくなっていった。もし、このまま帰ってこなかったら、単なる家出ではないかもしれないと思えた。自殺していたらと思うと、もはや、じっとしていられなくなった。二人の刑事に電話し、今すぐにも捜索願を出してもらおうかとも思ったが、やはり、必ず帰ってくる、と刑事が言ったことを信じ、9時まで待つことにした。

ピースもスパイダーも朝からアキちゃんが姿を現さないことに戸惑いを見せていた。散歩にも行けず、家の中でじっとしていたスパイダーはイライラが募り限界が来ていた。「ちょっと、ピースさん、僕の散歩はどうなったんだろうね。アキちゃんは、いないし、ママは、寝込んでいるし、動物に冷たいチンチクリンは、タクちゃんにつきっきりだし、僕のことなんか、眼中にないみたいだ。ピースさんが、僕を散歩に連れて行ってくれないか。退屈で、死にそうだ」

朝からずっと亜紀ちゃんにかまってもらえないのは、ピースもスパイダーも初めての経験で、これからずっと、亜紀ちゃんにかまってもらえなくなったらどうしようと不安になっていた。「アキちゃん、どこに行ったのかしら。こんなこと、初めてじゃない。こうなったら、黙って、散歩に行こうかしら。誰も、かまってくれないんだもの。しょうがないよね。スパイダー、ついておいで」

ピースとスパイダーは、こっそりリビングのベランダから庭に出て行った。拓実を抱っこしてソファに腰かけていたさやかは、そのことには気づかなかった。ピースとスパイダーが、通りに出ると公園の方角からカ〜カ〜とカラスの呼び声が響いてきた。風来坊の呼ぶ声だと気づいたピースとスパイダーは、公園に駆けて行った。スパイダーは、風来坊と話す気は毛頭なく、思いっきり元気よく公園を駆け回った。

後からちょこまかと駆けてきたピースは、ベンチにピョンと飛び乗り、顔を持ち上げ風来坊に声をかけた。「こんにちは、お元気でしたか？日が落ちるのが、早くなりましたね」ベンチ横の楠に止まっていた風来坊は、ベンチにフワッと飛び降りるとピースに返事した。「相変わらず元気だよ。ところで、なんだね、今日は、祭日だというのに、アキちゃん見ないね。病気でもして、寝込んでいるのかい？」

ピースは、お座りしてゆっくり話し始めた。「それが、大変なの。アキちゃんが、神隠しにあって。朝から、消えちゃったの。今だ、姿が見えないのよ。風来坊さんは、アキちゃん見なかった？」神隠しと聞いて、首を傾げた風来坊は、びっくりしてピョンとジャンプした。「神隠しかい。これは、大変なことじゃないか。一刻も早く、探し出さないと」ピースも大きくなずき、答えた。「そうなんだけど、猫と犬じゃ、手も足も出ないのよ。カラスさんたちで、探してくれない。空からだったら、探し出せるんじゃないかしら」

パタパタと羽を鳴らして、即座に答えた。「分かった。すぐに仲間に知らせよう、と言っても、アキちゃんの服装が分からなくっちゃ、探しようがないな～～。どんな服装してるんだい？」ピースは、困ってしまった。「そがね～～、朝からいないから、まったくわかんないのよ。とにかく、一人ぼっちで、寂しそうにしている女の子がいたら、教えてよ。もしかすると、その子かもしれないし」

風来坊は、とりあえず、糸島市と福岡市の仲間に知らせることにした。「分かった。仲間に知らせよう。一人ぼっちで、寂しそうにしている女の子だな。任せてくれ」風来坊は、そういうと、パタパタと天高く飛び上がって行った。スパイダーは、駆け回って気分がすっきりしたのか、ハ～ハ～と息を切らせて、笑顔でベンチにやってきた。「やっと、スッキリした。やっぱ、運動第一だよ。そう、風来坊は、どこに行ったんだ？からかってやろうと思ったのに」

あきれた顔のピースは、スパイダーに皮肉を言った。「アキちゃんが、神隠しにあったのに、よくも、のんきでいられるわね。アキちゃんが、このまま、戻ってこなかったら、私たち、捨てられるかもよ」ちょっと気まず顔になったスパイダーは、急にマジな顔つきになって返事した。「何を言うんだ。僕だって、心配してるさ。僕も、このあたりを探してくるよ。アキちゃんの匂いは、1キロ離れていても、分かるんだから」スパイダーは、一目散に大通りにかけて行った。

羽田発福岡行ジャンボ機は、北九州市の上空を、静かに飛行していた。乗客たちは、眼下に輝くネオンに歓喜の声を上げていた。窓際に腰かけていた亜紀も光り輝く市街の夜景に満面の笑みを浮かべていた。「おにいちゃん、宝石が輝いているみたい。すっごく、きれい」鳥羽は、そうだね、と元気がない返事をした。亜紀は、急に元気をなくした鳥羽が気になった。「おにいちゃん、疲れたの、元気ないね。アキバ、楽しかったね」福岡空港に近づくにつれて、鳥羽はますます気が重くなってきた。「そうだね、また、機会があったら、アキバに行きたいね」

亜紀は、アキバUDX、ラジオ会館、アニメセンター、ガンダムカフェでの楽しい一日を思い出していた。「キャラメル味のガンプラ焼き、おいしかったね。天神（てんじん）にも、ガンダムカフェ、できたらいいのに。AKB48のTシャツとタオル、ママ気にいってくれるかな～。ママを残して、アキバにいたりして、悪かったような気もするね。でも、お土産、買って来たからいいよね。今度は、ママとタクミとさやかお姉ちゃんたちと、一緒に行こうね」

ママという言葉聞いて、一層、鳥羽はおちこんだ。「おにいちゃん、今日は、ちょっと、ドジっちゃった」亜紀は、ドジったの意味が分からなかった。「ドジったって？」気まずそうな顔つきになった鳥羽は、思い切って自白する決意を固めた。「それが、それが～～、言いにくいな～～、マジ、マジごめん。アキバ行、アンナさんにメールしなかったんだ。大変なことをしでかした。ごめん、アキちゃん」

亜紀は、悪い冗談だと思った。「おにいちゃんたら、冗談でしょ。タクシーに乗る前に、“ママにメールした？”って聞いたら、“まだ、ちょっと早いから、空港についたらメールする”って、確かに、言ったよ。そうよね」鳥羽は、どう弁解していいか分からなくなった。しばらく黙っていたが、間抜けな自分を弁解した。「それがね、マジなんだ。空港で送信しようとアキバ行のメールは、書いていたんだ。でも、送信するの、忘れたんだ。バカだよな～～。アンナさん、ツノ出して、怒ってるよな。どうしようか」

一瞬固まった亜紀は、マジに悩んでいる鳥羽の顔をじっと見つめた。「マジに、マジなの。ママは、アキバ行を、知らないってこと。うっそ～～。今から、メールしても、後の祭りじゃない。ママに、ぶん殴られちゃうよ。アキ、帰るの怖い。ア～～、どうしよ～～」鳥羽の手が、小刻みに震えていた。ひきつった顔の鳥羽は、返事した。「マジに、俺って、バカだよな～～。アンナさんに、ボコボコにされるだろうな。どうしよ～～困ったな～～」

怒りが込み上げてきた亜紀は、マジな顔で鳥羽を責めた。「おにいちゃんが悪いんだからね。アキは、全然悪くないから。アキは、昨日、“かならず、ママにメールしてね”って、言ったからね。“分かった、メールしとく”って、確かに、おにいちゃん、言ったよね。帰ったら、おにいちゃんが、謝ってよ。殴られるのは、おにいちゃんだからね。アキは、悪くないんだから」鳥羽は、ちょっとしたイタズラのつもりだった。ところが、帰る頃になって、ことの重大さに気づいた。

真っ青になった鳥羽は、頭を抱えてガクンと頭を落とした。「マジ、ヤバイ。やっぱ、バカだった。どうしよう」亜紀のムカつきは、ますます膨れ上がった。「亜紀は、悪くないから。ママは、若い時、暴走族の総長だったのよ。ケンカは、最強なのよ。きっと、ボコボコにやられるよ」鳥羽の体は、震えが止まらなかった。「マジかよ。マジ、ヤベ～～。半殺しにあうだろうな～」

震える鳥羽を見て、ちょっと脅し過ぎたような気がした。鳥羽の右肩に手をやり、亜紀は慰めた。「とにかく、空港についたら、すぐに、メールした方がいいよ。手遅れだけど、ちょっとは、許してくれるかも」泣き出しそうな顔の鳥羽は、ヒョイと頭を持ち上げ、小さくうなずいた。「分かった。着陸したら、すぐに送信するよ。ア～～、マジ、バカなことした」

あまりのアホらしさに亜紀は、啞然とした。秀才の鳥羽が、どうして、メールを忘れたのだろうかと思議でならなかった。確かに、人には、うっかり、ということがあるが、アキバ行という重要な伝達を忘れるなんて、正真正銘のバカじゃないかと思った。隣の鳥羽の顔をじっと見つめて、秀才はウソで、本当は、バカなのかもしれない、と内心思ってしまった。

福岡空港上空は北風で、飛行機は旋回し、南から北に向かって着陸態勢に入った。静かなランディングをした飛行機は、ゆっくりと滑走路を走行しはじめた。鳥羽は、CAからの携帯電話使用許可のアナウンスを聞くや否や、スマホを右胸ポケットから取り出し、未送信メールを開いた。そして、謝罪文を追加した。“今、福岡空港に到着しました。本当に、ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい”送信にタッチすると、また、頭をガクンと落とした。

タクシー乗り場にやってきた二人は、運良くすぐに、AIタクシーに乗ることができた。死にそうな顔をした鳥羽としかめっ面の亜紀を見た運転手は、声をかけた。「あら、アキちゃんじゃない、どこまで、行ってきたの？」亜紀は、ひろ子さんだと気づき、元気良く返事した。「あ、おね～ちゃん、久しぶり。二人ね、アキバからの帰り。ガンブラエキスポに行ってきたの。すごく、楽しかった。ね～、おにいちゃん」

鳥羽は、家に帰ってのことを思うと恐怖を感じ、固まっていた。どうにか、苦笑いを作って、返事した。「は～～、どうにか、無事、帰ってこれました」元気がない声で返事をした鳥羽に声をかけた。「あら、元気、ないじゃない。たまに、都会に行くと、疲れるでしょ。迷子にならなくて、よかったじゃない。まあ、田舎者は、こんなものよ。まあ、何度か行ったら、なれるわよ」

鳥羽は、もう、二度と行きたくなかった。自分の愚かさに、つくづく、嫌気をさしていた。亜紀は、鳥羽がどうして元気が無いか、話すことにした。「あのね、おにいちゃんがね、元気が無いのは、」と話し始めたとき、鳥羽が、「ちょっと、ダメ、シ～～」と唇に人差し指を当てた。その様子を見ていたドライバーのひろ子は、ますます聞きたくなかった。「何よ、隠さなくてもいいじゃない。隠し事は、よくないわよ。話しなさいよ」

亜紀は、鳥羽の顔色をうかがい、一度うなずくと話し始めた。鳥羽は、頭を抱え、ガクンと頭を落とした。「あのね、アキバに行ったこと、空港について、今ごろ、ママにメールしたの。おにいちゃんたら、今朝、メールするの、忘れてたんだって。まったく、ドジったら、ありやしない」今ごろメールしたということは、朝からずっと、母親は、心配していたに違いないと思った。「ということは、アキちゃんは、ママに黙って、家を出てきたってこと？」

亜紀は、うなずいた。「そうなの。おにいちゃんが、こっそりアキバに行こうって言ったの。その方が、スリルがあるからって。だから、今朝の5時ごろ、こっそり家を抜け出して、おにいちゃんと一緒にタクシーで空港に行ったの。だから、ついさっき、ママは、アキバ行をしたの。おにいちゃんは、ちゃんと、ママにメールしとくって言ったのよ。それなのに、忘れるなんて。おにいちゃんって、ほんと、バカ。アキは、悪くないもん」

ひろ子は、もしかすると警察沙汰になっているんじゃないかと思った。鳥羽を怒鳴りつけようかと思ったが、今ごろになって、怒鳴っても、事態は収まらないと思い、二人に事の重大さを話した。「鳥羽君は、もう、高校生でしょ。黙って、連れ出すってことは、誘拐と同じなのよ。きっと、大騒ぎになって、警察沙汰になってるわよ。どうするの。分かってるの、鳥羽君」

鳥羽は、頭を抱えて、ウ〜〜〜とうなっていた。「ごめんなさい。僕が、すべて悪いんです。やっぱ、警察が来ているのでしょうか？ 搜索願が出されているのでしょうか？ ア〜〜、どうしよう。ア〜〜、バカ、バカ、バカ」鳥羽は、自分の頭を何度もたたいた。亜紀は、自分は悪くないと思ったが、なんとなく、自分も悪いような気がして、泣き出しそうになった。ひろ子は、このまま帰れば、鳥羽君は、警察に事情聴取されて、気の強いアンナさんにボコボコにやられると思った

。

ひろ子は、話を続けた。「今、メールはしたのね。ってことは、そのことは、警察には、連絡されたと思う。でも、鳥羽君がやったことは、誘拐事件と同じなんだから、アンナさんに、ボコボコにされるわ。覚悟は、できてるわね」鳥羽は、ア〜〜、とうなり、「ひろ子さん、助けてください。見殺しにしないでください。お願いします」と涙を流し、お願いした。

亜紀も鳥羽が、かわいそうになってきた。アキバに行ったのは、二人だし、おにちゃんは、亜紀のために、お小遣いをはたいて、アキバに連れて行ってくれた。黙って行ったことは、悪いことだけど、おにいちゃんは、とっても優しい人だと思った。おにいちゃんに責任を押し付けた自分が、恥ずかしくなってきた。「おにいちゃん、アキもアキバに行ったんだから、一緒に謝る。おにいちゃんが、殴られるんだったら、アキも殴られる。おにいちゃん、泣かないで」

きっと、警察沙汰になっていると思ったひろ子は、自分も一肌脱ぐことにした。「二人とも、こうなったら、覚悟を決めなさい。確かに、悪いのは、トバ君だけど、アキちゃんのために、アキバに行ったんだから、トバ君も、優しいところ、あるじゃない。きっと、警察は来てると思うけど、そこは、何とかなるわ。おね〜ちゃんは、デカには、顔がきくんだから、安心して。男でしょ、潔く、謝りなさい。ママも、分かってくれるって。もう、泣くのは、ヤメ」

助っ人が現れ、ほんの少し、気分が楽になった鳥羽は、力を振り絞ってつぶやいた。「はい、悪いのは、僕ですから、とことん、謝ります。本当に、反省しています。ひろ子さん、ご迷惑をおかけして、本当に、申し訳ありません。自分のしでかした過ちは、ちゃんと、自分で責任を取らなきゃいけませんよね。いかに、自分がバカか、今回のことでよ～～く分かりました。二度とこのようなバカなことはしないと誓います」

ひろ子は、十分反省した二人を励ますことにした。「よくぞ、言ったわ。それでこそ、九州男児。誰にだって、過ちはあるわ。わたしなんか、お母ちゃんから、叱られてばっかだった。家出をして、連れ戻されたこともあった。でも、青春なんて、こんなものよ。よっしゃ、ガンダムソングで元気を出しなさい。そらのかなたで、いくわよ」亜紀ちゃんは、ヤッター、と叫ぶとパチパチパチと拍手をした。

そらのかなたで あらそうがはじまる ほしがしずかに まばたくように はがねのよろいに
みをつつんだら こころがひげきを まとってしまった へいわのねがいは もうきこえない
がれきがかくずれる おとにけされて うごきはじめた れきしのはぐるま むかうさきには ぜ
つぼうしかない みんなしっているのに なぜ？なぜ？なぜ？

小さな恋

鳥羽のメールは、テーブルの上に置かれていたスマホの着信音を鳴らした。担任の先生からだと思ったさやかは、スマホを手にとると、素早く、メールを開いた。意外にも、鳥羽からだだった。早朝から二人でアキバに行き、今、福岡空港に到着したとのメールを受け取ったさやかは、寝込んでいるアンナのところに跳んでいった。アンナは、そのメールを読んで、ホッと安心した表情をするとドツと涙を流した。さやかは、亜紀が無事だったことに涙を流したと思った。

だが、アンナの涙は、さやかが思っていた涙ではなかった。亜紀の気持ちを分かってあげられなかった自分のふがいなさに涙したのだった。もっと、亜紀と会話していれば、もっと、一緒に遊んでやっていけば、亜紀の気持ちも理解でき、自分がアキバに連れて行ってあげられたと思った。また、亜紀と一緒にアキバに行ってくれた鳥羽のやさしさに感謝した。でも、黙って連れて行ったことは、許せなかった。

さやかは、鳥羽からのメールをアンナに知らせた後、すぐに、小太り刑事にも知らせた。知らせを受けた二人の刑事は、即座にアンナの自宅に向かった。6時30分過ぎに到着した二人の刑事は、駐車場で鳥羽と亜紀の帰宅を待った。都市高速を使って空港から約40分かかると考えると、6時50分ごろにタクシーは到着すると計算した。気落ちしてしまったアンナは、起き上がることができず、まだ寝床の中だったが、さやかは、玄関の中で拓実と一緒に待つことにした。

ひろ子は、なるべく早く帰宅できるように都市高速を使うことにした。空港通り入口から乗り上げ、福重（ふくしげ）出口を降りたAIタクシーは、6時55分に平原歴史公園（ひらばるれきしこうえん）に到着した。ひろ子は、駐車場のグレーのスイスポと顔見知りの二人の刑事を見つけると、チャットちゃんに指示を出した。「グレーのスイスポの左横に駐車して」即座に、チャットちゃんが、「了解」と返事するとAIタクシーは、バックでスイスポの左横に停車した。

待ち構えていた小太り刑事とヒゲ刑事は、現行逮捕をするかの如く、素早く、AIタクシーに駆け寄った。ひろ子も即座に飛び出すと血相を変えた二人の刑事にあいさつした。「あら、男前の刑事さん。奇遇じゃない。アキちゃんとトバ君は、私に任せて。事情は、メールで分かっているでしょ」亜紀と鳥羽が降りると、鳥羽を先頭に二人を玄関に向かわせた。ひろ子は、亜紀の後ろをゆっくりついて行った。

伊達は、多少なりともお説教をしてやろうと意気込んでいたが、ひろ子の顔を見ると何も言えなかった。「先輩、ひろ子さんに任せましょう。きっと、うまくやってくれますよ。トバ君も、心底、反省してるはずですよ。今回は、許してあげてください。お願いします」沢富は、鳥羽の過ちを責めるより、亜紀ちゃんへの優しさを褒めたかった。おそらく、神様は、将来、二人を結びつけるために、こんないたづらを仕組んだのではないかと思えた。

そっと、玄関に入った鳥羽は、踊り場に立って待っていたさやかの顔を見て、深々と頭を下げた。さやかは、無事に帰ってきた二人を見て、ちょっと微笑み、アンナの寝室に駆けていった。アンナは、ふてくされた顔で玄関にやってきた。心の底から怒りがこみ上げていたが、なぜか、無事に戻った二人の顔を見ると怒鳴る気になれなかった。「さあ、上がりなさい。人騒がせな、二人ね。今度から、出かけるときは、行き先を言いなさい。分かった」

鳥羽は、踊り場に駆け上がると、アンナの前で正座した。そして、「ごめんなさい、ごめんなさい」と言って、土下座した。それを見ていた亜紀も、素早く、鳥羽の後ろに正座すると土下座した。二人の姿を見ていると、先ほどまで爆発しそうだった怒りが一瞬にして消えた。なぜか、突然、笑いが込み上げてきた。「二人とも、十分反省したみたいね。鳥羽君は、おにいちゃんでしょ、もっとしっかりしなきゃ」頭をあげた鳥羽は、泣きそうな顔で、もう一度「ごめんなさい」といった。

アンナは、腕を振り上げると、今にも殴るふりをした。亜紀は、おにいちゃんが殴られると思い、目を細めた。アンナは、勢いよくゲンコツの腕を振り下ろした。だが、コツン、と小さなゲンコツを食らわせて、ニコッと笑顔を作り立ち去った。ホッとした亜紀は、ぴよんと跳び上がり、鳥羽に抱きついた。“おにいちゃん、ありがとう、おにいちゃん、ありがとう”と心の中で何度も叫んだ。